

Active Life Magazine

ISSN 0930-5731

VACATION®

NO.57/1994

8
月号



特集 英国
ウェールズの優しい歌
トルコ 光と影の軌跡

トルコ 光と影の軌跡

無限の可能性を秘めて

イスタンブールは、ボスホラス海峡を境に、アジア、ヨーロッパ大陸の文明が出会った町¹⁾。

古代からの文明を断々と受け継ぎ、

現実と夢、過去と未来、オリエンタルな雰囲気²⁾とヨーロッパ的な感覚をすべて包み込み、人をエキサイトさせる不思議な力をもつ。

この町に集約されている現代トルコの軌跡を、

近年注目されている地中海・エーゲ海岸のリゾート周辺で探してみると、

人類が太陽と豊かな土地に対して抱く憧れが、

遠く神話の時代から現代にまでなんら変わる³⁾ことなく受け継がれてきたことを実感させてくれる。

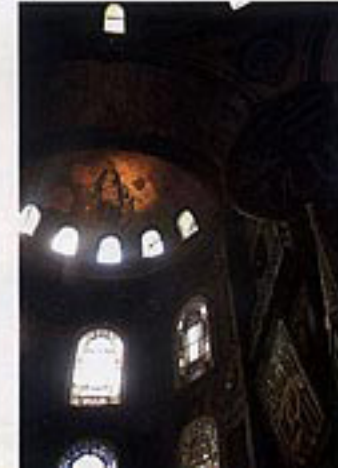
夕いちかわ としひで 写真・島内英佑

¹⁾ 国史館編『トルコ史』、東京大学出版会、1997年。『トルコ史』、東京大学出版会、1997年。



海に囲まれたイスタンブールでは新鮮な魚が獲れ、漁師みずから売りさばっている。ボラタ橋近くにて。

アヤソフィア大聖堂の内部。天井には「キリストを助く聖母マリヤ」のモザイクが描かれている。



オスマン建築の最高傑作といわれるブルー・モスク。本堂の尖塔（ミナレット）は世界唯一。



（上）ドルマバフチャ宮殿の内部。豪華をふんふんに使った装飾にはたけのいきがみられるほど。（下）豪華な中にもエレガンスが漂うドルマバフチャ宮殿のエントランス。

イスタンブールでも欧州のこのムネラルには、いつでも世界中の主要国の人々が集まってくる。さらに進むときれいなレストランやカフェが並ぶオルタキョイやベシククに降り着く。この町には野外アイスコが点在し、週末になるとドレスタップをして、さっさと降りにかけてける若者たちの姿をよく見かける。その風情はここがヨーロッパの一環であることを改めて実感させてくれるのである。郊外には純木住宅が建ち並び、アヤソフィア大聖堂やブルー・モスクのある観光の中心のスタンバハメットにも行けるモダンな豪華ホテルからスタートした。

トルコの地中海世界、その歴史に思いを馳せる

周りに、あまりにも多くの遺跡があるために不可成りなまでに地下鉄の建設も、現在計画中だ。

トルコの地中海世界、その歴史に思いを馳せる

周りに、あまりにも多くの遺跡があるために不可成りなまでに地下鉄の建設も、現在計画中だ。

トルコの地中海世界、その歴史に思いを馳せる



観光客に人気の聖索菲亞大聖堂には、思い思いに人が集まる。

サザン・アコースという女性歌手がトルコにいる。東洋的な情をも感じさせる歌声に欧米ポップス風のアレンジが魅力的な歌で、私は大ファンである。同国内のポップス・シーンでも二十年来中心的存在なのだという。イスタンブールにはもうひとつシンガーを育てる数多くの音楽アカデミーが存在し、トルコ・ポップスの発展地となっている。

そのイスタンブールにはヨーロッパとアジアを分けるボスホラス海峡が横たわっている。まさにサザン・アコース、トルコ音楽というふたつの文明の首都として栄えた町でもある。サザン・アコースの歌声の中にひびくインターナショナルな感覚はこのような東西文明の融合という土壌から生み出されてくるのであろう。

これこそ、こうしてインターナショナルな側面はすでに紹介されているが、私は今回、あえてトルコの西洋的なものも意識し、その歴史と融合することにした。

ヨーロッパの東端に位置するイスタンブールの輝き

アヤソフィア大聖堂ほどイスタンブールの歴史、いやトルコという国そのものの歴史を象徴しているものはない。ローマ帝国から分離したビザンチン帝国の主教堂として六世紀に建てられたが、現在は博物館として公開されている。一四五三年のオスマン・トルコ軍による征服の際、逃げ惑う市民たちの隠れ場所ともなった歴史を持つていることはつとに有名だ。市民たちが閉じこめられた空間に息をひそめ、征服者の足音に耳をたてていたであろうこの聖堂の壁には、イスラムの装飾が施され、天井には聖母マリヤとキリストのモザイク画が静謐な空間を見せようしている。

そして、そのオスマン・トルコ帝国末期の一八五六年に建てられたのがドルマバフチャ宮殿だ。この宮殿の土は東洋から来た民族の兵、スルタンである。しかしながら、この宮殿はあまりにもヨーロッパ的である。それこそのはず、十九世紀当時、最高峰といわれたフランス建築の様式を用いているのだ。その姿は、イスラムの文化を中心とした国にありながらヨーロッパ文明の香りを漂わせ、ボスホラス海峡の水辺で、モスクとともにこの町の景観をバラエティに富むものになっている。

ドルマバフチャ宮殿を出発点として、海峡のヨーロッパ側を北にさかのぼっていくと、ほどなくして外国の要人を迎えるチユラバレス・ホテルが行んでいる。

イスタンブールのタクシム広場近くの目抜き通りには一流店が並んでいる。週末とすれば行く人の多い場所で賑わう。





アスペンダスの野外劇場。一番上の客席からでもほとんどの演出のひそひそ話を聞き取ることができると言われる。古代人の知恵には驚かしてしまおう。



近ごろアフェスの遺跡。アレキサンドリアの多岐にわたるメインストリートの一部はローマ風に仕上がっていた。それでもう一部は、今でも野村農場へとつながっている。



トルコ語で「浴」の意味をもつ「ムスクン」。石灰質に洗れた石畳に訪れる人も多い。

ようには、自分たちの住む土地、その歴史に對しての愛着、責任感というものがしつかりとあるように、アンタルヤの城壁の中にあるヒサル・レストランは内部を当時のままに再現された。
「役々を守つていかなくては誰がそれを守るのでしょ」とトーマス・ワイルドマン、ティム・ニューレールさん曰く。
この町から車で一時間以内のところはいくつかの代表的な古代遺跡が存在している。先に紹介したペルマヤマ時代の彫刻劇場が舞石から幾層までは高さにはないが、残っているアスペンダス、アンツニーとアレキサンドリアのローマ時代、タナタの劇場として知られるシア、陵



アフェスでもっとも訪れる遺跡といわれるハイラタス神廟。アーチには女神タイウ、壁にはこの神の遺言が刻まれている。

て、文明の表裏をなつてきた歴史を持つ。エーゲ海、地中海には古くから多くの文明が栄えたことはトルコ語ならずとも周知の事実であろう。紀元前二千年の昔から、地中海は主要な交通路として栄えてきた。やがてギリシャ文明があらわれ、ヘレニズム文明を経てローマ帝国、ビザンチン帝国への引き継がれていく中で、賑々とヨーロッパ文明の基を形づくってきたのである。

エフェスには、ほかにもたくさん見所がある。柱廊を一段に重ねたセルシウス図書館の聖麗な姿からは、古代人の洗練された美意識を感じさせられる。さらに社交場をなすハートの印が残っていた。エフェスには、ほかにもたくさん見所がある。柱廊を一段に重ねたセルシウス図書館の聖麗な姿からは、古代人の洗練された美意識を感じさせられる。さらに社交場をなすハートの印が残っていた。

り、公衆トイレの跡があったりと人間のにおいを感ぜさせるものでいっぱいだ。いったい古代人たちは何を考えたからこれらの石を積み上げていったのだろうか。そうした歴史に思いを馳せると二千年の時間が一年に縮まってしまふ感覚に陥るのは私だけではないだろう。
こうした古代都市はパックス・ローマナ（ローマの平和）と呼ばれる時代に大きく発展した。紀元一世紀にむかえ、経済が停滞しなくなり漁りはじめ、帝国となったばかりのローマがこの地を支配した。それに伴ってメインストリートは整備され、都門が増やされたり、市場や競技場も建設された。つまり、都市としての骨格が整っていったのである。地中海に面したベルグの道筋にも足を運んでみた。正面の門から一直線にアクロポリスまで広い通りが伸びている。その両側には見事な装飾の施された店舗が立ち並び、かつてはその店舗に付随して店が列をなす、集められた珍しい産物が所狭しと売られていたはずだ。

ヨーロッパの旅行ジャーナリスト協会から、「地中海でもっともよく保存されている美しい」として賞を贈られたアンタルヤの港。



ふと気がつくとも道の真ん中に標の高さぐらいの水路跡が一本通っている。波を取り、町に思いをよそを目的とされたのだ。ここには人間がより良く生きようとして、自らの知能を体現する手段があふれているのである。これを文化と呼び、そしてなにを文化といふべきか。
水は神社に近い所へと落ちてゆくのは自然の摂理である。流れる水は道を一つ

くり、時の力を借りてやがて大地の姿までも変えてしまう。そうした観点に立つならば、パムッカレは自然によってつくられた最高の芸術作品といえよう。その奇観からトルコの観光地でも二本の指に入るといわれている。
丘の中腹から石段を含んだ階段が滝さだし、それが何万年もかけて一面に緑を敷き詰めたような石段の欄をつくりあげた。欄のひたつとつにはお湯があふれている。丘の上に向つと、いくつもの階段が自分の足もとから広がっていき、もうにも見えなくなる。温泉の熱湯は多く、ローマ人たちが保養地として利用していたという。

アンタルヤの街を中心とした地中海沿岸の一番はローマ人から「聖なる土地」。

アンタルヤ、リゾートとしての魅力あふれる地

しい山の頂上には出現する古代都市アルメアッソスなどである。アンタルヤやシナの古代博物館には、そうした遺跡から発掘された神々の大理石像が並べられていて、人類が太陽と豊かな土地に対して抱く憧れは古今東西の時代から現代まで、なから変わるものではないということがここで証明されているかのようである。

一九八二年より政府の軒ひりである「一帯の観光開発が始まった。ヨーロッパ、アメリカから多くの旅行者が来まり、彼らを満足させるリゾートホテルも充実してきている。

その中のひとつ、キリッシュ・ワールド・マジック・ホテルはこの国でもナンパーワンと評判のリゾートホテルである。アンタルヤから車で西へ四十五分、ケマルという美しい海岸の村の先にある。一歩中に見え踏み入れると、そこはまさに別世界。全体がひとつの雄大な美意識のもとに統一され、自然にもダンタルコ風建築は海の青とよく調和し、見た目にも心地よい。アークンヒリヤが吹きみだれる中庭に広がる大きなプール、その向こうには岩に囲まれたアラバイト・ビーチが地中海に湧いて広がっている。「ほとんどのヨーロッパからのゲストです。それもリビーターが多いんです」と自信たっぷりに対応してくれたのはマネージャーのエンバ・ネペル氏。飲まれたヨーロッパ人のリビーターが多いというのは、それだけこのホテルが洗練されているという証しでもある。

さらにアンタルヤの東三十八キロのベレックに一九九八年の完成をめざし、巨大なホテル・レジダーランド・プロジェクトが進んでいる。完成した際にはホテルは二十を数え、総ベッド数二万五千にも及ぶゴルフコース、アトラクション文化博物館や自然公園などを建設中で、ホテルのいくつかはすでに営業を始めている。この地域をもダンタルコのリビエラとすべし計画は着々とすすんでいるのである。

地中海ヨットクルーズの魅力

人との出会いが旅を印象的なものにしてくれる。ホテルムのヨット・チャーター会社のオーナー、デニール・シエルベマチオルグ氏はイスタンブールから十六年前にこの地に移ってきた。

アンタルヤから西へ約四百四十キロ、ホテルムの港はちょうど地中海とエーゲ海の境目にある。自然が印象的で、トルコでも有数のヨットハーバーを持つ。港の真ん中にあるホテルム城は中世に十字軍によって建てられたもので、いまは古代海軍博物館として開放され、周囲の海から引き揚げられた貴重な展示物が並べられている。

イスタンブールで生まれ育った彼は首都アンカラで経済学を学んだ後、生まれ故郷に戻ったのだが、大都市となったイスタンブールの都会生活に馴染めなかったという。そしてこの町にやってくるまでからスタートした彼は、数十隻のヨットを所有するまでになった。

「一度、海の深が身体に染みつくると二度と海から離れられなくなってしまう」と、カールのかわった髪を海風になびかせ、境界を口調で語っていた彼は、ヨットに乗り込むと目づきを愛した。てきばきと二人のクルーに指示を出す。全長十八メートルのバブリア号は五つの客室に十人まで泊まることができる。この地域には古くから造船の伝統があり、船はジュレットと呼ばれている。船が主な材料で木目を活かした流りは温もりを感じさせる。舟倉に並んでいて、キャビンの中はひとつの工房基といってもいいようなしつらいだ。

ヨットが出ると、彼はこのあたりの海について情熱的に語り始めた。ホテルムからアンタルヤまで、トルコでもっとも美しい海岸線が続いている。海岸線が入り組んでいて、すぐ後の船を見失ってしまうようなスポットでは、船を森をさまよっている感じになるという。アンソニーがクレオパトラのために砂を運んできたというクレオパトラ・ビーチのその砂の白さはまぶしくさえる。シエノーケリングで水中に沈んだ遺跡を見るなど、ヨットでなければ味わうことのできない経験がここには待っている。

そのほか地中海沿岸のワイティエやマルマリスといった魅力的な港町でのナイトライフも楽しませたい。

彼の熱心な勧めで我々はヨットで一晩を過ごすことにした。夕食後、トルコの酒ラカがまわってきたところ、彼はこうつぶやいた。

「ここで地中海の風に吹かれながら古代のことを考えたりするんですよ。二千年以上の昔にも同じ風に吹かれていた船乗りがいたことをね」

美しい印象的なホテルムの港。最近では別荘地としての開発も進んでいる。地中海でも有数のヨットハーバーだけに世界中からヨット、クルーザーが集まる。

「トルコで3本の指に入る」と評語の高いキリッシュ・ワールド・マジック・ホテル。キャパシティは、ピラ、ミルサイズ、パンゴローの4つの豪華施設からなる。



Kiris World Magic Hotel

Posta Kutumu09, 07100 KEMER-ANTALYA ☎(0202) 4800

オーソドックスなキャパシティ・サライのタイプでハイシーズン1,800/15~(朝・夕食べ放題)。



パドムクルーを基調とした清潔感溢れるキリッシュ・ワールド・マジック・ホテルの客室。

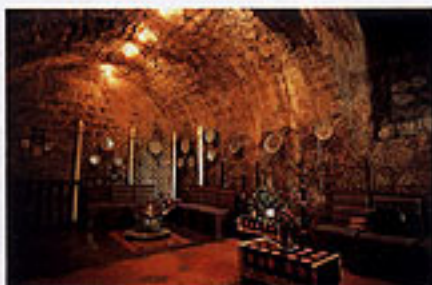
ヒサールレストランのオーナーの娘シエルさん。オスマン帝国の皇帝スルタンの血を受け継いでいるという。



Hisar Tesisi

Cumhuriyet Meydanı F.Kütüsü 216 ANTALYA ☎(0202) 32 81

中世の城壁を利用したトルコ料理レストラン。テラスはカフェにもなっている。



中世の城壁を再現したヒサールレストランのロビー。



世界の正統料理のひとつに数えられているトルコ料理。ヒサールレストランでは串の内ほろもろ人部隊な魚料理も豊富。

ラジオからサザン・アケスーの歌声が流れてきた。思わず彼も私も、リズムに合わせて船をゆすっていた。
デッキに出てみると見れば我々の船にとっても深く感じられた。海は静かで、水辺はもろがきらめいていた。
「いちがわ としほで」



ジャーナリスト)



ボイタムからマルサリス、フオチエなども湖船クルーズは真珠と清湖は美しいが、たまたま目のクルーズでもアレソソは可能だ。ヨーヨーのクルマベッチヤルが洗も屋計に映りついている。赤目赤目としたレッドの壁と木の床が印象的だ。シャワーが個室に付いていて快適なものだ。行った事とクルーズ料についていろいろと。



3人乗りタイプで1日48000円(オープン3月～10月)

Flama Tours
Nayir Textil Cal. 333C-D (opposite the Marina) 1900 H0601UM
☎0252341412



TRAVEL MEMO

トルコの地図は日本の約2倍、約280万平方キロメートル、首都はアンカラ、エエグ海、地中海沿岸の気候は日本の四季に近いが、6月中旬～9月下旬まではほとんど雨が降らず、気温は40度近くは上がることもある。しかし湿度が低いので日本の夏よりも過ごしやすい。
公用語はトルコ語、ほとんどのホテルや観光地、ショップなどでは英語が通じるが、ドイツ語ができればなおベター。
国内の移動のほとんどは車、長距離バスやミニバスが多い。鉄道は本数が少なく、接続も悪いという時間がかかる。近距離ならばタクシーが良い。
本誌で紹介したエフェソの古代都市遺跡、パムッカレの石灰洞へは、買場都市イズミールを起点にするように。地中海、エエグ海沿岸はボドゥルム、マルマリス、フィアディンなどを中心に、また、アンタルヤ、ケメール、ペレリタには五ツ足の表裏たワゾットホテルも多いので長期滞在がおすすすめ。
日本からイスタンブールまでは、トルコ航空の直行便が便利。木曜日の午後10時50分に成田を出発し、同日午後6時にイスタンブールに到着。夕方の到着なのでこれから国内各地への同日着陸便の利用が可能。アンタルヤへは29時15分、21時30分、イズミールへは29時55分、20時05分、ボドゥルムへは約1時間で日行者ワマンへは19時45分、月・水曜日の午後3時、翌朝8時30分に成田に到着する。出発便と同様、同日中に地方からの帰便が可能。さらにビジネス、ファーストクラスの食事には前菜として乾性にのつたオリーブオイルもあるほか、甘味付けのパーンツナレピヤなども楽しめる。
●トルコの気に関する問い合わせ先
●トルコ駐在大使館 広報課 事務官 室
〒100-8303 東京都中央区神宮前2-33-6
FAX 03-3478-4603・46037
●空路に関する問い合わせ先
トルコ航空会社
〒100-8303 東京都中央区神宮前2-33-6 1F 航空
部内 (03)3478-4603 (FAX)03-3478-4603